

## 巻頭言

公益社団法人 日本放射線技術学会  
東北部会副会長 遊佐 烈

第3回東北放射線医療技術学術大会の開催に関しましては、各方面より多大なるご支援とご協力を賜り誠にありがとうございました。平成23年3月11日の東日本大震災から約3年近い今でも、被害が東北地方の広い範囲に及んだためか、各県でも思うように復興が進まない中、原発事故が重なった福島県で追い打ちをかけたのは、放射能汚染のため自宅に帰れず、長い仮設住宅での生活を強いられている事態であり、この事実を広く知って頂く絶好の機会と考え、原発関連のセッションを設け広く演題募集を行った結果、新潟県を含む東北各県、東京都、広島県からのエントリーもあり、一般研究発表数では141演題、参加登録者数は601名に達しました。これも皆様の平日頃からの研究成果の表れであろうと頭の下がる思いであります。更に放射線技師の学術発表の場ではありますが、北福島医療センターの丹治一実行委員長と「市民も参加出来る学術大会を目指そう！」という同じ熱い思いから、学術大会のテーマは「自ら立つ・守る・ひらく未来」とし、更に市民向け副題として「放射線のこと、福島で学ぶ。福島と学ぶ。」とさせて頂きました。市民向けの講演、放射線関連ポスター展示、更に相談コーナーも設けるなど、市民と会員が一体となれる学術大会を目指し、100名近い一般市民の方にもご参加を頂きました。特別講演はラジオ福島アナウンサーの菅原美智子さんに「報道の立場から見た原発事故と放射線」について話して頂きました。菅原さんは予稿集の中でも、新潟県長岡市に避難されている小さなお子さんがいるお母さんたちのアンケートを取り上げていますが、その中には他の人にはなかなか理解して頂けないような心の葛藤が多く読み取れます。事故後の報道では誤解を招くようなものもあり、一般住民には不安が広がり、数値のみが独り歩きしてしまったような気がします。二度と起こっては欲しくない事故であり、それによって報道側も大きな教訓を得たであろうと思います。福島県立医科大学放射線健康管理学講座教授の天津留晶先生は福島県民を対象におこなわれた県民健康管理調査結果についてご報告を頂きました。天津留先生は一般住民の方々にとっては少し難しい内容だったかもしれないと話されておりますが、科学的に信頼性のある健康情報の発信が大切であることには間違いはありません。放射線技師もその発信者の一人になって、各個人が自分で判断して頂けるような手助けをしていかなければならないと痛感しました。機器展示においては放射線技師と一般市民も同じ会場とし、各企業の方々に、一般市民の方からの質問には分り易く説明をお願いする等、市民と一体となった大会を開催出来たと自負致しております。

今後ともこの東北放射線医療技術学術大会が常に100演題を超え、参加者数も1,000名を超えるような学術大会になるように皆様と共に盛り上げ、次回の新潟でまた皆様とお会いしましょう。